【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	千葉県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	東金市立東金中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	7	6	1	２０	３７
生徒数	２３２	２６１	２３４	3	７３０	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

評価の機能と役割を生かした指導の改善を軸に，「確かな学力」の向上を図る
～教育活動全体を通しての基礎・基本の定着と自己教育力の育成をめざして～

２．研究内容と方法

（１）　実施学年・教科

全学年・全教科（必修教科・選択教科）・総合的な学習の時間・生徒会活動

『確かな学力』を「基本的な生活能力」「各教科の基礎的・基本的な学力」「実践的な学力」の三層構造として捉え，それらの育成のためには幅広く，バランスよく取り組んでいく必要があるため。

（２）年次ごとの計画

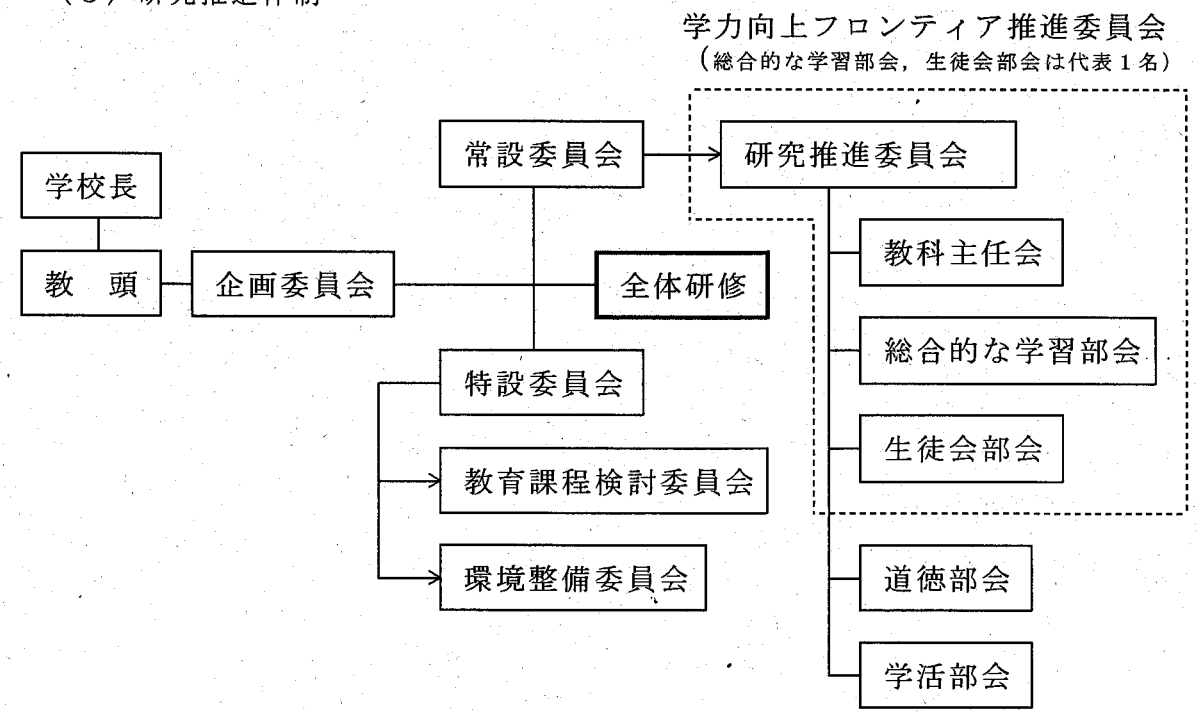
平成15年度	○テーマ 評価の機能と役割を生かした指導の改善を軸に，「確かな学力」の向上を図る ～教育活動全体を通しての基礎・基本の定着と自己教育力の育成をめざして～ ○研究見通し ◎教科指導の中で ①　年間指導計画，評価基準表をもとに，より詳細な単元の評価（指導）計画及び週計画を作成し，教員相互の共通理解のもとで計画的な指導を継続かつ改善しながら行っていけば生徒個々の基礎・基本の定着が図れるであろう。 ②　到達目標，計画，実践，評価（自己評価）の学習の流れを明確にし，それを支援していく中で，生徒の主体性が育ち，自己教育力が身についていくであろう。 ◎教科指導以外で ③　教育活動全体を通して，目標，計画，実践，評価等を明確にすると共に，生徒一人ひとりが生徒会活動や学校行事に主体的に取り組む中で，自己教育力は育つであろう。

平成15年度	○研究の内容・方法 ◎基礎・基本の定着 ① 年間指導計画，評価基準表をもとに，より詳細な単元の評価（指導）計画及び週計画を作成し，計画的な学習評価の確立を図る。 ② 毎時間の評価をもとにした個に応じた指導の手立てを中心に学習指導の工夫と改善をする。（わかる授業の展開と効果的な学習支援など） ③ 単元末における個に応じた指導（習熟度別学習など）の指導形態を工夫する。 ④ ティームティーチング，少人数指導の特性を考えた効果的な学習評価（指導）を明らかにする。（数学科，英語科，選択教科を中心に） ⑤ 月１回の補充の時間（国・数・英），定期テスト前の補充タイム（全教科），選択教科における補充のコース（国・数・英・理・社）の効果的な運営の方法を明らかにする。 ◎自己教育力の育成 ⑥ 到達目標，計画，実践，評価（自己評価）の学習の流れを明確にし，必修教科，選択教科における自己教育力の育成方法を考える。 ⑦ 総合的な学習の時間（刮目タイム）の工夫をする。（プロジェクト学習の指導体制，ポートフォリオ評価の確立を中心に） ⑧ 生徒会活動の活性化や生徒主体の学校行事の運営を図る。 ※ 上記の指導改善を図る評価体制の確立（校内外） ＊研究計画の立案と共通理解　＊研究組織の確立　＊保護者への概要説明 ＊年間指導計画，評価基準表，単元の評価計画の共通理解と実践 ＊補充時間の検討と実践　＊総合的な学習の時間の共通理解と実践 ＊生徒会組織，学校組織への共通理解と実践　＊形成的評価の工夫と指導 ＊選択教科への共通理解と実践　＊校内授業研究（６月，１１月） ＊自己教育力育成のための生徒会行事の運営　＊補充タイムの検討と実践 ＊学力観についての実態調査の実施と分析（全職員，全校生徒） ＊１５年度のまとめの作成　＊ホームページの開設 ＊次年度の方向性の検討

平成16年度	○テーマ 評価の機能と役割を生かした指導の改善を軸に，「確かな学力」の向上を図る ～教育活動全体を通しての基礎・基本の定着と自己教育力の育成をめざして～ ○研究見通し ◎教科指導の中で ① 年間指導計画，評価基準表をもとに，より詳細な単元の評価（指導）計画及び週計画を作成し，教員相互の共通理解のもとで計画的な指導を継続かつ改善しながら行っていけば生徒個々の基礎・基本の定着が図れるであろう。 ② 到達目標，計画，実践，評価（自己評価）の学習の流れを明確にし，それを支援していく中で，生徒の主体性が育ち，自己教育力が身についていくであろう。 ◎教科指導以外で ③ 教育活動全体を通して，目標，計画，実践，評価等を明確にすると共に，生徒一人ひとりが生徒会活動や学校行事に主体的に取り組む中で，自己教育力は育つであろう。

平成16年度	○研究の内容・方法 ◎基礎・基本の定着 ① 年間指導計画，評価基準表をもとに，より詳細な単元の評価（指導）計画及び週計画を作成し，計画的な学習評価の確立を図る。 ② 毎時間の評価をもとにした個に応じた指導の手立てを中心に学習指導の工夫と改善をする。（わかる授業の展開と効果的な学習支援など） ③ 単元末における個に応じた指導（習熟度別学習など）の指導形態を工夫する。 ④ ティームティーチング，少人数指導の特性を考えた効果的な学習評価（指導）を明らかにする。（数学科，英語科，選択教科を中心に） ⑤ 月１回の補充の時間（国・数・英），定期テスト前の補充タイム（全教科），選択教科における補充のコース（国・数・英・理・社）の効果的な運営の方法を明らかにする。 ◎自己教育力の育成 ⑥ 到達目標，計画，実践，評価（自己評価）の学習の流れを明確にし，必修教科，選択教科における自己教育力の育成方法を考える。 ⑦ 総合的な学習の時間（刮目タイム）の工夫をする。（プロジェクト学習の指導体制，ポートフォリオ評価の確立を中心に） ⑧ 生徒会活動の活性化や生徒主体の学校行事の運営を図る。 ※ 上記の指導改善を図る評価体制の確立（校内外） ＊第１年次の反省に基づく見直しと検証 ＊計画的な支援方法の確立 Ⅰ 特設の時間での支援　Ⅱ 補充学習のたけの教材開発 Ⅲ 個人差に応じた指導法の確立 ＊適切な評価方法の確立 ＊小・中の連携 ＊研究成果の普及（公開授業研究，ホームページ，各研究会への参加） ＊研究の成果とまとめ

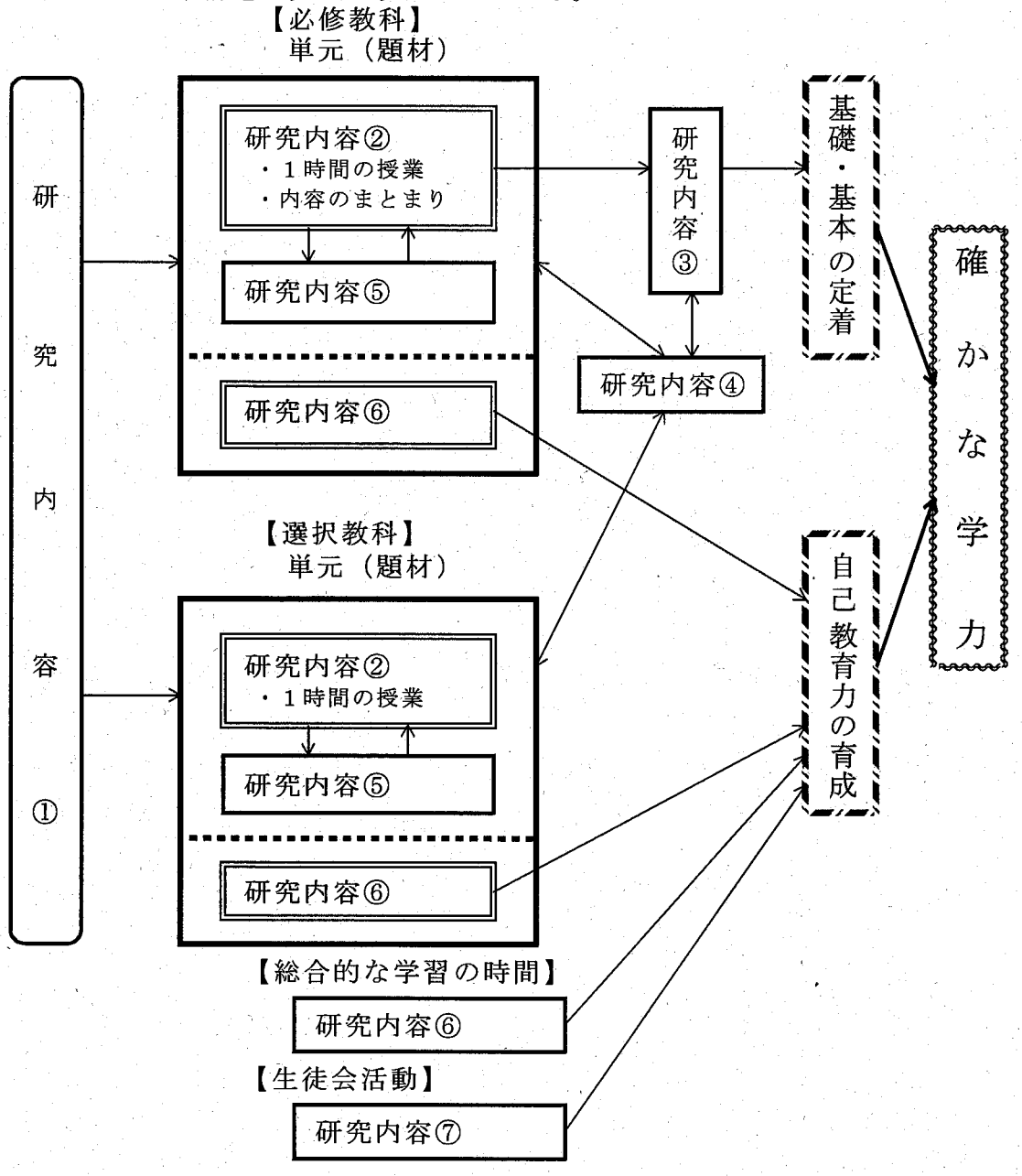
（３）研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

本研究の基本構造は次のようになっている。



この流れの中で，形成的な評価でＣ評価（目標に対して不十分）と判断された生徒に対して，どのように教員が計画的に支援をし，生徒自身もそれを克服していくかというのが本研究の大きなテーマである。

◎計画的な支援による成果

単元の評価計画を作成することによって，指導と評価の一体化という教員間の意識の共通理解がさらに強まったように感じる。また，不十分な生徒の支援に対して，従来であると担当学級単位であったものが，あらかじめ特定の時間を設定することができるようになり，学年単位で実施することが可能になった。単元の指導全体にかかわる評価テストの作成，練習プリントの作成などもきちんと分担することで協力的に進めることができるようになった。次にそれぞれの支援の場面ごとの成果をあげておく。

Ⅰ　特設の時間での支援

放課後の時間を使った補充指導や再評価テスト，定期評価テスト前の補充タイム，水・金の６校時に実施している補充の時間（３０分）など，計画的に特設の時間を設けたおかげで成果はでてきている。生徒も回を重ねるごとにそれぞれの時間への取り組みがよくなってきている。

１・２年生には冬季休業中に補充学習の日を設けたが，予想以上の生徒が参加した。３学期初めに実施した評価テストでも，補充学習に参加した生徒は向上がみられた。

○定期評価テスト前の補充タイムの成果

＊目的意識をもって参加した生徒は成果があった。
＊きめ細かな指導ができた。
＊生徒がどのようなところでわからなくなるのか把握できた。
＊進度の遅れを取りもどせた生徒がいた。
＊効果的なアドバイスができた。

○水６，金６での国・数・英の補充の時間（３０分）の成果

＊書くことに対しての抵抗が少なくなった。
＊補充の翌週に評価をするという流れの中で，回を重ねる毎に，自主的に練習する生徒が増えてきた。
＊単語の意味を調べようとする生徒が増えてきた。
＊個に応じたプリントづくりを試みたところ，生徒も意欲的に取り組んでいた。
＊言語領域を中心に行ってきたが，形式を工夫したところ取り組みが意欲的になってきた。
＊評価テスト等で漢字の読み書きや計算問題の正答率があがってきた。
＊回数を重ねるごとに集中力がでてきた。

○選択教科での補充の成果

確かな補充学習の時間として位置づけることができた。

Ⅱ　補充学習のための教材開発

忙しい中で効果的に生徒へ支援をしていく方法として最も効果があがるものである。今年度実践を通して，いろいろな教材を蓄積できた。

Ⅲ　個人差に応じた指導法の確立

相互授業参観を行い，個人差に応じた指導法の研修を深めることができた。本年度の実践を通して各教科の方向性が定まってきた。

○単元末における個に応じた指導の成果

単元末の習熟度別学習では，「１人でどんどん進められてよかった」「友達と答えを確認しながら進められたので安心してできた」などの声が聞かれ，どの教科も生徒の反応はよかった。保健体育科などの技能を主とする教科においてもグループでの助け合い学習などを導入することでかなり効果をあげている。

○Ｔ．Ｔや少人数指導による個に応じた指導の成果

本校は１年生の数学と２年生の英語で今年度少人数指導を実施してきた。英語科の少人数指導の実践では，次のような成果が得られている。

＊少人数指導ということで，自己評価票にもていねいにアドバイスや激励の言葉をコメントすることができ，生徒の意欲づけにつながった。
＊少人数指導のクラスでＡＬＴとＪＴＥの２人でスピーキングテストを行ったところ，時間的なゆとりができ，不十分な評価を得た生徒が再度，練習した後にテストに挑戦することができた。
＊日米の学校生活の違いなど，文化のことを話題にしてＡＬＴが話をすると生徒は大変興味を持って聞き入っており，Listening の意欲づけとなった。

数学科では，学習内容に応じてＴ．Ｔにしたり，等質分割型の少人数したり，習熟度別や課題別の少人数にするなどの工夫をしているが，生徒の取り組みもよい。

Ｔ．Ｔについても技術・家庭科の実践では，栄養士をゲストティチャーとして，栄養士の立場から専門的な意見を発表してもらうことで，めりはりのある授業を実施することができた。

このような計画的な支援の成果として，次のような結果が得られた。

【１年生数学科：正の数・負の数】

＊表現・処理②・・・反対の性質をもつ２つの量を正の数・負の数を用いて表すことができる。

	はじめの評価	支援後の評価
[評価Ａ]	３６．８％	６３．１％
[評価Ｂ]	３６．８％	２３．７％
[評価Ｃ]	２６．３％	１３．１％

＊表現・処理③・・・数の大小関係を，不等号を用いて表すことができる。

	はじめの評価	支援後の評価
[評価Ａ]	２７．０％	７８．４％
[評価Ｂ]	５９．４％	５．４％
[評価Ｃ]	１３．５％	１６．２％

＊表現・処理④～⑤・・・２つの正の数・負の数の加法や減法ができる。

	はじめの評価	支援後の評価
[評価Ａ]	３５．０％	７５．０％
[評価Ｂ]	２０．０％	２０．０％
[評価Ｃ]	４５．０％	５．０％

＊表現・処理⑥・・・２つの正の数・負の数の乗法や除法ができる。

	はじめの評価	支援後の評価
[評価Ａ]	４２．５％	８０．０％
[評価Ｂ]	３０．０％	１７．５％
[評価Ｃ]	２７．５％	２．５％

＊表現・処理⑦－(1)・・・乗法や除法の混じった計算ができる。

	はじめの評価	支援後の評価
[評価Ａ]	２４．３％	３２．４％
[評価Ｂ]	３７．８％	３５．１％
[評価Ｃ]	３７．８％	３２．４％

＊表現・処理⑦－(2)・・・四則混合計算ができる。

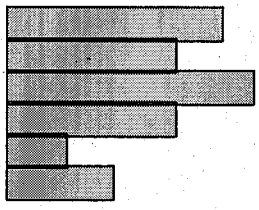
	はじめの評価	支援後の評価
[評価Ａ]	１８．２％	３６．４％
[評価Ｂ]	２７．３％	６．１％
[評価Ｃ]	５４．５％	５７．６％

結果をみると全体としては「はじめの評価」より「支援後の評価」のほうが到達目標を達成した割合が高くなっている。個々には，Ａ→Ｂ，Ａ→Ｃ，Ｂ→Ｃなどのように評価が下がった生徒もいるが大部分の生徒は教員の支援により向上している。これは形成的な評価を通して，計画的につまづいている生徒への支援を行っていくことの重要性を示している。

１年生の〔正の数・負の数〕の表現・処理⑦－１と表現・処理⑦－２では，支援後の到達目標を達成した割合が向上はしているが，わずかである。これはやや難しい到達目標になるといろいろな既習事項がからんでくるためわずかな時間の支援では十分でないことが原因になっていると思われる。これらの到達目標の支援を十分に行っていくためには，１つの単元にこだわらない長い期間を見通した評価計画とそれに基づく支援が必要になってくる。

【１年生社会科：歴史的分野　中世の日本】　　実施回数１２回

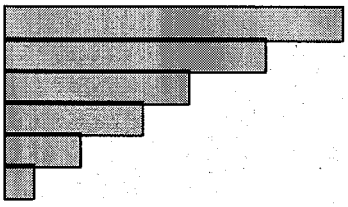
資料１（１回目）



１００点	２２．９％
８０点	１７．１％
６０点	２５．７％
４０点	１７．１％
２０点	５．７％
０点	１１．５％

考察１
テスト実施の初期は，得点のばらつきがあり，１問も答えられない生徒が１割以上いた。テストへの取り組みも，消極的な面もみられた。

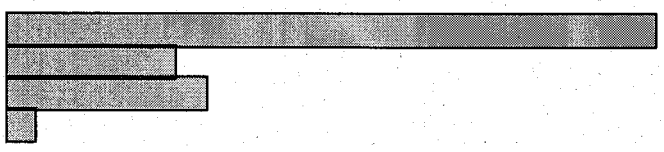
資料２（６回目）



１００点	３２．１％
８０点	２５．０％
６０点	１７．９％
４０点	１４．３％
２０点	７．１％
０点	３．６％

考察２
テスト実施中期になると，下位の得点も上位へと移行してきている。取り組む姿勢も積極的な雰囲気が教室にでてきた。忘れものが減ってきた時期である。

資料３（１０回目）



１００点	６１．３％
８０点	１６．３％
６０点	１９．４％
４０点	３．１％
２０点	０．０％
０点	０．０％

考察３
実施の後期　全員が得点につなげ，６０％以上の生徒が基礎，基本的事項を理解できている。授業開始前から教科書を開き復習している姿が見られた。

「５問テスト」に対する生徒の声（アンケート）
・最初は面倒だったが，授業の大事なところがわかるようになった。
・授業に集中できる。　・歴史に興味がもてた。　・続けてほしい。

【１年生国語科：言葉の単位】

＊言葉の知識・理解・技能　→　文，文節，単語など，言葉の単位とそれぞれの性質を理解する。

○文節について

	はじめの評価	支援の評価
評価Ａ	２４．３％	６２．１％
評価Ｂ	４２．５％	２７．０％
評価Ｃ	３５．１％	１０．８％

○単語について

はじめの評価	支援後の評価
１８．９％	４０．５％
３５．１％	３５．１％
４５．９％	２４．３％

◎自己教育力育成による成果

単元の到達目標を確認することで，授業の目標を明確にすることができた。そのため，生徒にとっては授業の復習や家庭学習でも何を勉強したらよいかわかりやすくなっている。評価テストの勉強においても目標や学習のポイントがはっきりしているため，役立てることができている。また，計画的に評価を行っていくことで生徒自身にとっても何が不十分なのかを把握することができ，学習内容の復習に見通しを持った取り組みができるようになった。このことは，定期評価テスト前の補充タイムへの参加にも現われている。

１学期中間評価テストと２学期期末評価テストで，補充タイムに参加した生徒の延べ人数は次の通りであった。（国・数・英・理・社）

中間評価テスト前
＊１年生　１１２人　　＊２年生　３０人　　＊３年生　４６人

期末評価テスト前
＊１年生　１５３人　　＊２年生　６７人　　＊３年生　６６人

また，保護者の意識も変わってきている。

◎自己評価票を見た保護者からの一言（１年生数学科の場合）

正の数・負の数
＊乗法や除法の混じった計算が出来ないようなのでがんばって計算できるようになってほしい。
＊特にＣのところを再度しっかり学習する。
＊全体的には理解できているようです。苦手なところはなるべく早く見直し苦手を克服するように心がけましょう。この調子でがんばろう。
＊毎時間先生の話をきちんと聞いている授業姿勢がお父さん，お母さんにはよくみえます。わからないことは先生に聞いて数学大好きでいてください。次も今まで通りがんばってください。応援しています。
＊Ａが多いのでまずまずだと思いますがＣをＢにできるように今一度復習して理解できる状態にまでもっていってほしいです。
＊努力していると思います。全部Ａになるように今後もがんばってください。
＊数学に懸命に取り組もうという姿勢が見えるし努力もしていると思う。ただ，数学的な見方・考え方の自己評価を見ると数学のおもしろさがまだわかっていないようだ。このおもしろさがわかってくると他の自己評価もっと完全なものとなると思う。
＊不得意な内容を夏休み中に復習してＣをなくし，ＢもＡに努力してほしいと思います。

自己教育力の育成は「総合的な学習の時間」「生徒会活動」などの取り組みよっても着実に生徒の変容となって表われている。

２．今後の課題

◎計画的な支援での課題

単元の評価計画をもとに評価テストなどを実施していくと，その処理等に追われ十分な支援ができない場合があった。評価の場面，回数，それを活かした支援などをもう少し整理して，お互い協力しながら，見通しがあり，しかもゆとりができる評価（指導）計画を考えていかなければならない。

Ⅰ　特設の時間での支援
次年度で各学年とも長期休業明けに国・数・英・理・社の学力テストの実施を予定しており，長期休業中の補充学習についても検討していく必要がある。

○定期評価テスト前の補充タイムの課題
課題として，わずか１時間のこの時間をどう効果的に運営していくかということがあげられる。適切な教材開発はもとより，この時間を単発に実施するのではなく，一連の支援活動の中の最終段階として考えていく必要がある。そうすることで参加生徒数も増加し，成果もあがってくるのだと思う。今年度の取り組みを基盤にしてさらに工夫していくことが大切である。

○水６，金６での国・数・英の補充の時間（３０分）の課題
課題として，この時間への取り組みへの全校のバックアップ体制とより効果的なプリント等の教材開発があげられる。特に，評価テストをこの時間で行った際，学級担任がそれにむけて指導してくれたおかげで大きな成果をあげた事例もありバックアップ体制の必要性を痛感した。

Ⅱ　補充学習のための教材開発
教員から生徒への一方通行になりやすいので，生徒個々が説明の不明な点については遠慮せず，すぐに，友達や先生に質問して，理解を深めておく習慣を身につけさせておくことが肝要である。自己教育力の育成とも関連してくるが，このことが生徒間で「あたりまえのこと」となるようにすることが大切である。
到達目標への達成が不十分な生徒だけでなく，十分に達成できている生徒の知的好奇心をどのように充足させるかも忘れてはならない。そのための発展的な学習のための教材開発も行っていく必要がある。

Ⅲ　個人差に応じた指導法の確立
評価の機能と役割を生かした支援を中心にして学力の向上を目指しているのであるが本来ならＣ評価の生徒をつくらない「個人差に応じたわかる授業」の展開をすることが基本であろう。全校を対象にした「学習に対する意識・実態調査」では，授業の内容が７割以上理解できると答えた生徒が
国語　５７．８％　数学　５６．６％　英語　５３．６％
理科　４２．９％　社会　４８．２％
であった。これらの割合をもっと高くしていけるような「個人差に応じたわかる授業」の展開の研究もＴ．Ｔや少人数指導などを軸に平行してすすめていかなければならない。学習到達度・学習速度・興味や関心・生活経験・学習スタイルなどの個人差に応じた適切な授業形態を研究していくべきであろう。

○単元末における個に応じた指導の課題
今後の課題として，コース選択等における生徒の意識の向上があげられる。生徒の中には適切なコース選択をできない生徒もいた。学習の目的，意味を意識させる工夫が必要である。
また，補充・発展型にしても課題選択型にしても適切な教材開発を行うことが重要になってくる。この形の学習では，１人の教員ではなかなか対応が難しい。そのため生徒が自力解決をする場面が必然的に多くなってくる。生徒自身が適切に自力解決できるような教材開発がこのタイプの学習の成否を握っているといっても過言ではない。今後の大きな課題である。
人的環境と物的学習環境の整備も重要である。少人数加配がないから１人の教員でしか対応できない，だから，協力的指導はできないという考えではこのタイプの学習は発展していかない。各教科で工夫を凝らし人的環境を整備していく必要がある。また，教員がなかなか対応しにくい部分を物的環境整備で補える場合が多い。たとえば，授業に関する情報が教室内に掲示してあることで，生徒の関心が高まり，新たな課題を発見したり，課題追求・解決の過程でヒントを得ることもできるようになるからである。教科用の教室がある場合は，学習環境によってさらに大きな効果が期待できる。教科の学び方・教科授業に関する情報等を掲示したり，書籍や問題解決のための用具を備え付けたりすることができる。生徒が作成した記録や作品等を掲示したりすることもできる。各教科の創意工夫が必要なところである。

○Ｔ．Ｔや少人数指導による個に応じた指導の課題
このように指導教員が複数になったり，学習集団を少人数にすることで，ある程度の学習効果は期待できる。ただ，Ｔ．Ｔや少人数指導の意義はこれだけではない。Ｔ．Ｔや少人数指導は，それぞれの生徒の個性によりきめ細かく対応する方法・手段であり，そこに個に応じた指導・工夫が求められているわけである。こうした視点から，学習の目的によって指導方法や指導形態の工夫を考えていかなければならない。時に

は，一斉授業の方が効果があったり，Ｔ．Ｔや少人数指導の方が効果があったり，その学習内容と目的によって変わってくる。そこの部分を吟味して，実践を行っていくことが大切である。
　また，数学や英語などの教員の加配がない教科でのＴ．Ｔや少人数指導の実現についても学校として体制をつくっていく必要がある。

◎自己教育力育成での課題

全校を対象にした「学習に対する意識・実態調査」では

○授業で配布した到達目標を意識しながら学習をしている
　よくある　１３．６％　ときどき　５４．３％　ほとんどない　３２．１％
○不十分だった目標を克服しようとしている
　よくある　２７．８％　ときどき　４８．７％　ほとんどない　２３．５％
○月１回の補充の時間に前向きに取り組んでいる
　よくある　５１．３％　ときどき　３３．８％　ほとんどない　１４．８％
○定期評価テスト前の補充タイムにできるだけ参加したい
　よくある　２０．８％　ときどき　２７．６％　ほとんどない　５１．６％

であった。このことからも，まだまだ自己教育力の育成には工夫を要する。
ただ，同じ調査で「どの教科もよくわかりたい」と答えた生徒が

よくある　７３．１％　ときどき　２０．７％　ほとんどない　６．３％

にも及ぶ。生徒たちはわかりたがっているのである。このことを突破口に，よりよい方向性を見出していく必要がある。また，学校や学年などで発行する各種の便りや総合的な学習の時間の様子や学力の向上についての情報をお知らせする刮目通信などを活用して保護者の意識も変えていく必要がある。

その他の課題

＊　今後の最も大切な課題として，Ａ，Ｂ，Ｃの評価の信頼性があげられる。到達目標を達成できたかどうかをみる評価そのものがあいまいであるとどの生徒に支援が必要なのかがわからなくなってしまう。評価基準表に従って，その時間や場面で評価をしていくのであるのだが，これの信頼性をどうつくっていくのかがこの研究の大きな課題となろう。評価基準表の見直し，評価方法の工夫などを次年度に向けて取り組んでいく必要がある。
＊　年々学力を支える基本能力が不十分な生徒が多くなってきた。必然的にそれらの力も育成していかなければならない。そういった意味からも小学校との連携もこれからの大きな課題になってくる。
＊　この研究の成果が生徒にどのような変容をもたらしたか，数値データなどで表して，分析していく必要がある。本年度から次年度への生徒の変容をどのような形で表していくか具体的なデータを示すことによって研究の成果がより鮮明にみえてくるであろう。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

＊学力観についての実態調査の実施（全校生徒，教職員）
　・全校生徒の実態把握及び教職員の考え方の把握のために７月１５日に実施。
　・夏季休業中に分析，校内研修を実施。
＊実力テストの実施
　・計画的な学習態度及び学習習慣の定着，既習内容の再学習，学習方法の見直し，自己学力の把握のため全学年で実施。
　・６月４日，１１月４日に実施。三者面談等で学習方法などについて話し合う。
＊千葉県標準学力テストの実施
　・生徒の学力到達度の把握。
　・２月１２日，３月１５日に実施。校内で分析をし，次年度の指導に役立てる。
＊各教科で形成的評価のための評価テスト等を随時実施し，日常的に生徒の学習の取り組みや学力把握を行っている。

Ｖ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊教育課程説明会（４月１９日実施）
　・全校の保護者を対象にして，本校の教育の重点，学力向上のための方針，選択教科や総合的な学習の時間の目的などを伝える。
＊刮目通信の発行（総合的な学習の時間及び学力フロンティア関係の内容）
＊三者面談（１・２年→１～３学期，３年→１～２学期）
＊授業参観（４月１９日，１０月２５日）
＊平成１５年度第１回千葉県学力向上推進協議会（５月３０日）
＊千葉県教育庁山武地方出張所所長訪問（６月３０日）
＊新任教務主任研修会（８月２７日　講話・・・先輩教務主任に学ぶ）
＊山武教育研究会（９月２６日　数学科提案）
＊平成１５年度学力向上推進山武地区協議会（１０月３日）
＊地域ミニ集会（１０月２５日）
＊第３５回千葉県算数・数学教育研究大会（１１月１９日　数学科提案）
＊東金市教務主任研修会（１１月２１日　学力向上についての提案）
＊東金市立鴇嶺小学校授業公開研究会（１月２９日　研究協議）
＊平成１５年度第２回千葉県学力向上推進協議会（２月４日）
＊ホームページでの発信（準備中）

【新規校・継続校】　１５年度からの新規校

【学校規模】　１６学級以上

【指導体制】　少人数指導（数学，英語，選択教科，総合的な学習の時間）
Ｔ．Ｔによる指導
（数学，英語，選択教科，総合的な学習の時間）

【研究教科】　国語，社会，数学，理科，外国語（英語），音楽，美術，技術・家庭，保健体育
その他（総合的な学習の時間，生徒会活動）

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　有